

総社市のインターン生

総社市役所などで今年、インターンシップ(就業体験)に臨んだ大学生が、体験を通じて感じた課題解決のための政策を市に提言した。西日本豪雨の災害対応を受けた施策や、

乗り合いタクシーの雪舟くんを活用した観光振興策など若者らしい視点のアイデアが示された。市は可能な限り政策に反映させることにしている。

大学生ボランティア組織

雪舟くんネット予約

若者視点で政策提言



インターンシップに参加したのは、くらしき作陽大(倉敷市玉島長尾)、県立大(総社市窪木)、環太平洋大(岡山市東区)など6大学の学生計46人。8月13日～9月14日の5

雨で被災した下原地区の設置と災害に備えた訓練を提案。西日本豪

17日間、市秘書室や市政情報課、消防本部、図書館、総社保育所などで実際の業務を体験した。

を訪れた際、市職員と地元住民が連携できていたのに感心したといい、「普段の活動で職員や住民と顔が見える関係をつくっておくことが、非常時に有効に働く」とした。「災害発生時に子どもたちの居場所が少ない」と感じたのは、県立大保健福祉学部2年の秋山瑞希さん。保育士や幼稚園教諭資格を持つ人に協力してもらい、災害発生時に市内に居場所スペースをいち早く確保する案をまとめた。「安全に遊べる場所があれば、ストレスがたまりにくい」と指摘する。

雪舟くんについて、県立大情報工学部3年鈴木杏奈さんと山口桃(左) 総社保育所で保育士の体験をするインターンシップ生 果さんは、ネット予約の導入を呼び掛けた。鈴木さんは「学生が利用しやすくすれば市中部に若者を誘導できる」と効果を挙げた。JR総社駅前にある空き家を活用した活性化策を提案したのは同三宅真子さん。「カフェや総社のお土産が買える施設があれば、駅前ににぎわいが生まれ、市のイメージも良くなる」とする。これらの提言は、学生が10月下旬に報告。市は導入の検討を始め、片岡聡一市長は「行政側とは違った角度から見た貴重な意見ばかり。精査し可能なものは実行に移したい」と話している。総社市は2009年からインターンシップ生を受け入れている。(古川和宏)